

ジュリアン・グリーン作品における 手紙について (3)

井上三朗

1. 問題提起
2. 告白のためらい、または不可能な告白
3. 発送（投函）されない手紙
4. 『悪人』の問題
 - (1) エドウィージュの不可能な愛の物語と手紙
 - (2) ジャンの〈悪人〉の物語と手紙
 - (3) 『ジャンの告白』
 - (4) 執筆・出版過程の考察
5. 結び

(太字は今回掲載分)⁴⁰⁾

4. 『悪人』の問題

ところで、作中人物の孤独性ととも、告白の不可能性が、手紙とのかかわりでもっとも悲劇的なかたちで浮き彫りにされているのは、『悪人』であると思われる⁴⁰⁾。この小説は1955年に『ジャンの告白』（以下、場合により『告白』と略す）を削除した版が刊行され、その十八年後の1973年に、『告白』をふくむ完全版が公表された。この作品発表過程は、成立過程とあわせて、作者グリーンじしんの告白の問題とかかわっている。私たちはこの章において『悪人』をとくに取りあげたい。この作品では主として二人の中心人物、エドウィージュとジャンの物語——不可能な愛の物語と〈悪人〉の物語——が語られ、この二人が手紙を作成している。そこでまずエドウィージュの物語と手紙を、次いで、ジャンの物語と手紙を検討し、それから『ジャンの告白』をみたあと、さいごに作品の執筆・出版過程について考察することにしたい。

(1) エドウィージュの不可能な愛の物語と手紙

エドウィージュは物語が始まる十年前、みなしごになり、親戚のヴァスール夫妻にひきとられて成長してきた。エドウィージュが孤児であるという事実

は重要であろう。この境遇はエドウィーヅの孤立性をうかがわせる。つまりエドウィーヅには、自分を保護し愛してくれるはずの両親がなく、憩いと平和と幸福の場としての<家>を喪失したところで生きているのだ。このような孤立した状況のなかで、エドウィーヅは他者と遭遇することになる。第一部第三章で述べられているように、適齢期をむかえたエドウィーヅのために、ヴァスール氏の館でパーティーがもよおされる。このパーティーの席でエドウィーヅは、ユルリック⁴²⁾によってガストン・ドラングジュという若者にひきあわされる。エドウィーヅは「ひどく退屈」で「とても醜男^{おとこ}」(p.227)なこの青年にはじめは反撥するけれども、まもなく夢中になってしまう。そしてガストンとの出会いののち、エドウィーヅは愛の情熱によって生きることになる。しかしこの情熱は苦悩をもたらす源にしかならない。なぜならガストンは、エドウィーヅの前に一度だけ出現し、ひとことも言葉をかわすことなく去っていった見知らぬ人にすぎないからだ。やがてエドウィーヅは孤独感におしひしがれ、「仮借のない絶望」(I-5, p.243)の餌食になるのである。

こうした中で、エドウィーヅはガストンとの交流をもとめて、手紙を執筆している。

「ある晩、彼女 [エドウィーヅ] が、けっして発送されることのない例の手紙の一通を書いていたとき、彼女はドアをノックする音を耳にした」(I-5, p.244)。

この箇所は、エドウィーヅがもう一人の中心人物ジャンの訪問をうけるところを語っているのであるが、ここでも発送(投函)されない手紙がみられる。おそらくエドウィーヅは自己の愛する思いと苦しみをガストンに伝え、ガストンの理解をもとめる気持ちから手紙をしたためるのであろう。しかし手紙は名宛人とどかないかぎり、そうした願いを実現しない。このためエドウィーヅはますます深い孤独のなかに落ちこんでいく。では、なにゆえにエドウィーヅは手紙を発送しないのであろうか。告白への願いと同時に告白へのためらいがひそんでいるからであろうか。この点にかんして、読者は速断することはできない。というのも、『他者』のカーリンと同じように、エドウィーヅは名宛人の居所を知らないため、手紙を発送しようと思ってもできないからだ。とはいえ、告白がエドウィーヅにおいても不可能なものとしてあることは明明白白な事実なのである。

エドウィーヅの物語のこのあとの展開を素描しておこう。第三部第一章において、エドウィーヅは散歩中、偶然ガストンのすがたをみかける。そこで彼女は第三部第二章、ガストンを自分に紹介したユルリックの知りあいで、骨

董店をいとなむアルレットを訪問し、ガストンのことを問いただす。そして第三部第三章で、ふたたびアルレットの店におもむき、ガストンに合わせるという約束をとりつける。第三部第四章で再会がなされる。だがこの再会によって、エドウィージュの愛の望みはすっかりたたれる。ガストンは人の心の痛みを少しもわかろうとせず、金銭や物質^{もの}にしか興味をもたない自己中心的な若者であるからだ。冷ややかな態度をとるガストンを目のあたりにして、エドウィージュは愛の感情を打ち明けることなく別れる。エドウィージュはこれまで孤独と沈黙の中で愛の情熱をつらぬいてきた。だが、自分のかすかな期待が裏切られたからといって、内心の情熱をもちやどうすることもできない。エドウィージュは情熱の苦悩と絶望からの出口を死にもとめる。最終章（第三部第五章）で語られているように、エドウィージュはピストルで自らを撃ち、果てるのである。

ガストンとの出会いから、自殺にいたるまでのエドウィージュの物語を概観してきた。その過程でエドウィージュが発送（投函）されない手紙を作成していることを指摘した。エドウィージュの手紙は物語の進展とあまりかかわっていない。彼女の悲劇的な最期は何よりもまずガストンの人格に原因しているであろう。しかしエドウィージュの手紙は、告白の不可能性によって特徴づけられるがゆえに、彼女の愛の形態を明確にしているのではないだろうか。手紙は、愛が不可能な・告白されないかたちをとることを浮き彫りにしているのではないだろうか。そしてエドウィージュの死はこの愛の苦悩の延長上にあり、少なくとも手紙がその苦悩の一段階を示していることはたしかなように思われるのである。

(2) ジャンの〈悪人〉の物語と手紙

次に、ジャンの〈悪人〉の物語と手紙を検討することにしよう。ジャンの物語は、終始告白のテーマとのかかわりで提示される。すなわち作品の冒頭、プロローグの部分で、不眠の夜をすごすジャンは、「全く口にすべきではない真実を語りたいという誘惑」（I-0, p.199）にかられて、机に向かい、告白をこころみる。しかし文章を書き綴ったばかりの紙をひき裂くことで告白に挫折し、ふたたび沈黙の中に閉じこもってしまう。

こののち、ジャンは第一部第五章、不可能な愛に苦悩するエドウィージュの部屋を夜に訪ねるといのかたちをとって登場する。そしてエドウィージュに、自分が散歩中、刑事から尾行され、尋問され、逮捕されそうになったことを伝えるとき、「ぼくは四十歳になる。もの静かで害のない、書斎の男だ。けれどもエドウィージュ、ぼくは先程、自分が社会の目には、君たちの目には、

悪人 (malfaiteur) とつつっていると感じたのだ」(p.246) と言う。ここで <悪人> という作品のキーワードが示されるのであるが、エドウィージュはジャンの話の少しも理解しない。ジャンもまた、「まさに何がなんだかさっぱり君にわからないからこそ(…), ぼくは君にこんな打ち明け話をしたかったのだ」(p.246) と説明しているように、自分の話が理解されないことを予想したうえで打ち明け話をしたのである。けれども相手の理解をもとめない打ち明け話になんの価値もない。かくしてここでも告白の衝動と挫折がみてとれる。とはいえ、ジャンがこのあとエドウィージュの愛するガストンのことに話題を転じ、ガストンへの思いを断ち切るよう忠告しつつ、「ぼくもまた苦しんでいるのだ、しかも君と同じように」(p.248) と付け加えているところから、読者はジャンの <悪人> のドラマの輪郭をとらえることができる。 <悪人> とは同性愛者の同義語であり、同性愛の性向とからんで犯罪者のように警察から追われたがゆえに、ジャンが <悪人> 意識にとらえられたこと、そしてジャンがエドウィージュと同じくガストンへの不可能な愛の情念に呻吟していることを見抜くのである。

このあとのジャンの生の軌跡をたどっておきたい。第一部第八章で語られているように、ジャンはナポリへと旅立つ。この旅は、ヴァスール夫人の家系調査と聖セバスチアンの肖像画研究とを表向きの目的としている。だがこの旅の真意は、 <悪人> としての自己、ガストンへの不可能な愛に苦しむ自己と訣別するという点にある。そういうわけで、第三部第三章であかされているように、ジャンは旅先のナポリで毒をあおいで自殺するのである。

以上がジャンの物語の概要であるが、ジャンもまた手紙をしたためている。すなわち死を間際にしたジャンは、旅先のナポリから、遺言的価値をもつ二通の手紙をエドウィージュに書きおくっている。一通目の手紙は、第三部第二章にみいだされる。この手紙のなかで、ジャンは、第一部第五章における打ち明け話の延長として、 <悪人> として生きることの困難さを告白しようとする。ジャンは自分を取りまく「全体的な敵意」(p.355) について語り、ジャンが寄寓していたヴァスール家の所在地であるリヨンのまちを離れたことにふれて、こう書いている。

「それにまた、ぼくはまちから離れたほうがよかったです。君に言えない色々な理由から、まちはぼくにはいとおいしいものでしたが、そこでは昼も夜も身のまわりに危険がうごめいていました。こうした言葉はおそらく君には謎めいたものに思えるでしょうが、ぼくはそうであることを望んでいるのです。というのも、ぼくが

誰であるかを見抜く能力が君にあると思っていたら、あえてこんな手紙を書いたり
はしないでしょうから。もし見抜かれたら、ぼくは恥ずかしさのあまり病気になっ
てしまうことでしょう。でもぼくは君に話をしたいのです、君だけに…」(p.355)。

ジャンは「全体的な敵意」とともに、「身のまわり」にうごめく「危険」に
言及することで、自己の<悪人>のドラマを開示しようとしている。しかしジャン
は、「ぼくは君に話をしたいのです、君だけに」と言いつつも、「ぼくが誰で
あるかを見抜く能力が君にあると思っていたら、あえてこんな手紙を書いたり
はしないでしょう」と認めているように、ここでもエドウィージェュが理解しな
いことを見定めたうえで告白をこころみている。この手紙はエドウィージェュに
読まれるので、発送(投函)されない手紙ではない。ジャンは、手紙を発送・
投函することを前提にしているからこそ、全面的な告白をなしえないのだと思
われる。

またジャンは一通目の手紙で次のようにも言っている。

「ぼくは苦しんでいます、エドウィージェュ。君と同じように愛しているがゆえに、
苦しんでいるのです。ぼくたちのあいだにはこの絆があり、それは断ち切ることが
できないほどに強い絆なのです。仮りにぼくが愛する人物の名を教えたとすれば、
君は堪えられないでしょう」(p.355)。

ジャンはガストンへの不可能な愛の苦悩を語っている。けれどもジャンは、
不可能な愛の対象がガストンであることを明示してはいない。エドウィージェ
ュの反応あるいは反撥をおそれて、愛の対象の名をふせている。したがって、こ
こでも告白は不完全なままなのである。

こんどは二通目の手紙をみてることにしよう。第三部第三章に置かれてい
るこの手紙では、ジャンはエドウィージェュに、ガストンへの愛を思い切るよう
助言することに比重をかけており、最初の手紙ほど自分のことを語ってはいな
い。とはいえ、ジャンはそれでも、「君はそうとは知らずに、君のと奇妙にも
似かよったドラマの傍らを通りすぎたのです」(p.397)と言って、自己の内心
のドラマを示唆しようとしている。この言い方はエドウィージェュの理解を越え
たまわりくどい、抽象的な表現である。この一文の手前で、ジャンが「あの同
じ若者を、君よりもはるかに深く愛している別の人間」(p.397)の存在を知ら
せているので、読者は、この文がガストンへの叶わぬ情念の苦しみを匂わせて
いることをようやく納得するのである。告白という観点からみれば、二番目の
手紙は一番目の手紙とくらべて、内容的にはるかに後退している。それゆえ、
ナポリでしたためられた二通の手紙は、『人みな夜にあつて』のアンガスやウィ

ルフレッドの手紙、あるいはまた、『漂流物』のエリアースが下宿屋で書いた手紙と同じように、発送（投函）されているとしても、告白の欲求と同時に告白のためらいを看取させる。結局、この二通の手紙は、ジャンにおける告白の挫折、告白の不可能性を跡づけているといえるのである。

(3) 『ジャンの告白』

ところで、ジャンはナポリへと旅立つ以前、今検討した手紙よりもはるかに重要な文書を作成していた。完成版テキストの第二部に挿入された『ジャンの告白』(*La Confession de Jean*)がそれである。プレイアード版で五十七頁になるこの『告白』は二つの部分にわかれ、大半の頁を占める前半部分では、少年時代から、若くしてヴァスール家のもとに身を寄せる時点までの回想をとおして、ジャンが<悪人>に生成するにいたったいきさつが語られている。前半部は以下のように要約される。

少年時代、ジャンは病弱のため、学校に行くかわりに家庭教師について教育を受ける。厳格で怒りっぽいボロン先生の後任の、若くて温厚なパリス先生の影響のもとに、ジャンは学問への意欲とともに霊的なものへのあこがれをつのらせていく。パリス先生は「かつて聖職者をこころざしていた」(p.284)ほどの宗教的感性の持ち主で、教会では聖歌をうたい、婦人たちから称賛をあつめている。だがパリス先生には隠された一面があった。人間の肉体美を表現した、そしてジャンには「悪霊たち」(p.284)の化身と思えるアポロンの彫像をまえてして賛嘆し、あるいはまた、たそがれどきいかがわしい場所を徘徊するといった面である。こうした行状はジャンの父親によってあばかれ、結局パリス先生は故郷のまちリオンを追われる。こののちジャンは学校に入れられる。ジャンのうちには修道生活を夢みるほどに熱烈な信仰がやどっている。ジャンはこれまで純粋さへのこだわりのなかで、また、母親の監視もあって性の現実を知らないなかで生きてきた。そしてジャンは常軌を逸した性向をもつにいたる。フィリップと呼ぶ学友にどうしようもなく惹かれ、不可能な愛の情熱に胸を焦がすようになる。はじめのうち、ジャンの内心ではフィリップへの愛とキリスト教の信仰は両立・共存しているように思われる。しかし信仰は徐々にゆらぎ出し、修道生活の計画も父の急逝にともなって放棄される。学校を卒業後、生活の糧を得る必要からジャンは親戚のヴァスール氏を頼ってパリに出、ヴァスール氏の友人で薬剤師をしているグロンダン氏の店で働く。だが薬局の勤めは一年ほどしかつづかず、ジャンはこのあと画家、次いで作家をこころざす。このかん、ジャンの内的生活は急転する。ジャンは<悪人>の世界に足を踏み入れるよう

になる。夜の街での中年の紳士との出会いと語らい、あやしげな男たちの群れつどう辻公園への出入り、その辻公園でのパリス先生との再会とそのあとの交流、そしてイギリス人の男との甘美な旅などを経て、ジャンは美しい若者とのアヴァンチュールをもとめてさまよう欲望の人間に豹変する。そして作家を志望したとき、ジャンは<悪人>として生きる自己を告白した小説『悪人』の作成をくわだてる。だがジャンはこのくわだて、言いかえれば、告白のころみに挫折し、作家になることを断念する。定職につかないままに第一次大戦が勃発し、ジャンは従軍する。休戦ののち、ジャンはパリにもどり、<悪人>としての生活を再開する。相かわらず禁じられた快樂を漁りつづける。そして経済的に自立することができないジャンは、親戚のヴァスール氏がパリからリヨンに転居する際、同行することになるのである。

以上が『ジャンの告白』前半部の要約である。次に後半部を概観することにして。後半部分では、<悪人>として生きるジャンの最近の苦悩が綴られている。すなわちジャンは仕事をすることによって、つまり聖セバスチアンの肖像画の研究をすることで、肉体と精神の均衡をはかろうとする。しかしかろうじて維持されてきた調和は、学校時代に恋をしたフィリップのよみがえりというべきガストンとの出会いによってもろくもくずれる。ジャンはふたたび燃えるような情念にかきたてられ、また、若さへのあらがいがたい渴望にとらえられて、うわべだけの好意を金銭で買いとる。孤独と欲望の苦しみに責めさいなまれたジャンは、ガストンが「与えてくれないもの」を「街にさがしもとめる」ようになる (p.325)。夜の彷徨の生活が再開され、ジャンは心ならずも欲望のおもむくままに行動する。だがジャンのおこないはまもなく警察の目にとまり、ジャンは刑事のきびしい監視をうける身となる。以上のことを述べたあと、ジャンは、第一部第三章でも語られているヴァスール氏の館でのパーティーのことに言及し、ガストンをかいまみたことでいやました自己の懊悩を伝え、さいごに靈的なものに惹かれる気持ちを暗示して『告白』をおえている。

『ジャンの告白』の内容を大ざっぱにみてきた。一見してわかるように、『告白』は<悪人>として生きるジャンの秘密・苦悩を全面的に開示したものであり、告白の願いを完璧に実現したものである。ジャンは若いころ、小説『悪人』の作成に失敗したし、作品冒頭でも告白をころみて挫折していた。しかしこの『告白』の執筆によって、ジャンは語るもしくは書くという次元では、告白という長らくの悲願を成就したのである。しかしながら、告白のいとなみは語るまたは書くという行為によって成り立つとしても、同時に告白の受け手の存

在を前提としている。告白とは、聞かれあるいは読まれることがなければ、本来の目的を達成したことはみなしがたい。では作品において『ジャンの告白』はいったい誰によって読まれるのであろうか。

この点にかんして、『ジャンの告白』がエドウィージェュに宛てて書かれた手紙であることをまずもって指摘しなければならない。すでに第一部第五章において、ジャンは夜の散歩からの帰りにエドウィージェュの部屋に立ち寄り、エドウィージェュを相手に告白をくわだて、蹉跎していた。そこでジャンは口頭によってではなく、手紙という手段をもちいて告白を敢行しようとするのである。『告白』は次のような文章ではじまっている。

「エドウィージェュ、この文章を読むのがもし君だったら、ぼくの予測は正しいものとなって、偶然がぼくたちのために役立つだろう。実際、ぼくの秘密をあばいてもらうためにぼくが当てにしているのは、君の女性としての好奇心なのだ。君が知るべきではない⁴³⁾ こと、ぼくが君に語る権利がないことがらを、他のいかなる方法で君に知らすことができよう？ だが不承不承ぼくがした忠告を君が無視しようと心に決めたからには、君は真実を知るべきだし、不平を言ってはならない」(Ⅱ-2, p.279)。

さいごの文で言われている「不承不承ぼくがした忠告」とは、言うまでもなく、ガストンへの思いを断ち切るようにすすめた忠告のことである。したがって、『ジャンの告白』はエドウィージェュにガストンへの愛を断念させることを表向きの目的とした手紙なのである。だがこの手紙は、重要なことに、発送・投函されない。ジャンは、エドウィージェュが『告白』を読むことを期待しつつも、エドウィージェュに手渡す努力をおこたり、一切を運命にゆだねてしまうのだ。ジャンが当てにするのは「偶然」と、エドウィージェュの「女性としての好奇心」とにすぎない。エドウィージェュが発見するというほんのわずかな可能性にすべてを託して、ジャンは『告白』の原稿を自室の筆筒の奥にしまい込み、ナポリへと旅立ってしまう。こうしたふるまいからは明らかにジャンの告白のためらいが浮かびあがってくる。そしてジャンの出発ののち、『告白』は、不運にもエドウィージェュではなく、ヴァスール夫人の妹のポーク夫人によってみつげられる。第二部第一章で述べられているように、ポーク夫人はジャンの部屋の洋服筆筒を整理しているとき⁴⁴⁾、原稿の包みが片付けてあるのを目にするのである。ポーク夫人はこの包みをもち出し、自室で包みをあけ、しらべる。『告白』の原稿は一枚ごとにポーク夫人の吟味あるいは検閲をうけたあと、あたかも恥ずべき人間の忌まわしい病いの証^{あか}しでもあるかのように密封され、隠

匿される。『告白』の原稿はポーク夫人の部屋の「大箆笥の引き出しの奥」(Ⅱ-2, p.336)にしまい込まれ、鍵をかけられ、もはや日の目を見ることはないのである。このように『ジャンの告白』はエドウィージェ宛てに書かれた手紙であるにもかかわらず、エドウィージェには読まれない。しかし名宛人にとどかない手紙は意思の疎通をはかるという固有の目的をけって果たしえない。おそらくジャンは、『告白』がエドウィージェによって読まれる確率がきわめて低いからこそ、<悪人>としての自己の全貌をあかすことができたのかもしれない。『告白』作成後のいきさつを視野に入れるとき、『告白』は逆説的に言って告白の不可能性を露呈しているのである。

(4) 執筆・出版過程の考察

ここで『悪人』の成立・発表過程を検討することにしたい。『悪人』は1936年12月に書きはじめられ、38年4月には『ジャンの告白』が完成された。だがグリーンは38年5月27日、完全版テキストの第三部第一章の途中まで書いたところで執筆を放棄した。グリーンが『悪人』にふたたび着手するのは1955年1月であり、半年ほどかかって残りの部分を書きたし、作品を完成した。けれども、はじめに述べたように、1955年版では『ジャンの告白』は削除された。『告白』をふくむ完全版が公表されるのは1973年のことにすぎない。こうした執筆・出版過程を考慮するとき、三つの疑問がわいてくる。グリーンはなぜ1938年に作品の執筆を中断したのか、どうして55年に執筆を再開したのか、また、55年版刊行に際して『ジャンの告白』を削除した理由は何なのか、という疑問である。以下、こうした問いについて考察してみたいと思う。

これらの問題を考えるまえにまず指摘しておかなければならないことは、『ジャンの告白』の自伝的性格である。修道生活を夢みるほどまでに熱烈な信仰をもちながらも、同性愛の性向を有し、快樂をもとめて街を彷徨する<悪人>に変貌するジャンの内的なドラマは、後年自伝の公表によって明らかになるように、作者グリーンのものである。1974年刊行の自伝第四巻『青春』⁴⁵⁾において告白されているように、グリーンもまた、同性愛の性向を有することで、深刻な肉体的苦悩を経験しなければならなかった。たとえば、グリーンもまた、ジャンと同じく、美しい若者とのアヴァンチュールをもとめて夜のパリの街を徘徊したし、さらには、薄ぎたないホテルの一室で名前をもたない男と肉体的な交わりを結ぶことさえあった。したがって、『ジャンの告白』は、作中人物に仮託するかたちで作者じしんの同性愛者としての秘密を開示したものであり、のちにグリーンが発表することになる自伝の内容を先取りしている。

『ジャンの告白』はグリーンの告白でもあったのである。

このことを踏まえて、1938年5月に作品が中絶された事情を考えてみよう。グリーンじしんは1955年版『悪人』への序文の中で二つの理由を挙げている。一つは「宗教への強い関心」である。「実際、数年前から宗教への強い関心のために、私は世の中から、『悪人』で取り組んだ問題からしだいに遠ざかりつつあった」⁴⁶⁾と彼は述べている。おそらく『告白』完成の時点で作品の制作の必要性・必然性がなくなったのであろう。というのも、『告白』は霊的なものに惹かれる心の動きを披瀝したところで終わっており、第三部の筋の展開は作者の目指すのとは逆の方向に向かうことになるからだ。つまり第三部はジャンもエドウィー・ジュも地上（肉体的なもの）への執着のために自殺に追い込まれる過程を物語っている。38年5月の段階でこのような結末が作者の構想のなかになかったとしても、主人公たちのドラマにこれ以上参与することは無意味であるのみならず、宗教への回帰あるいは魂の救いと相容れないと判断されたにちがいないのである。

1938年の執筆中断にかんしてグリーンが挙げるもうひとつの理由は、当時の社会情勢である。「私たちは当時、ストライキと戦争の危機の雰囲気の中で暮らしていた。そして私たちが慣れ親しんできた世界はますます壊れやすいものに思われた」⁴⁷⁾と彼は言い、「増大する全体の不安」⁴⁸⁾が作品の執筆をためらわせたのだと述懐している。たしかに戦争の勃発、いわば世界の崩壊を目前にして、同性愛といったような個人的な問題に取りくむことは困難である。こうした危機的な状況にあっては、現実を凝視するのではなく、現実逃避の願望が生じる。『悪人』放棄ののちグリーンは輪廻転生をあつかった『ヴァルーナ』の制作に入るけれども、この『ヴァルーナ』は「現実世界からのがれようとするはげしい努力」⁴⁹⁾から生まれたのである。

上に述べたように、グリーンは1938年の『悪人』中絶の理由として宗教への志向と当時の社会情勢を挙げている。しかしながら、グリーンの説明は納得できるとはいえ、不十分な印象を与える。端的に言って、『ジャンの告白』の内容もまた、仕事の中断に影響を与えているのではないだろうか。このことに関連して、『告白』の中で、作家を志望する若き日のジャンが小説『悪人』の制作をくわだて、断念するくだりは示唆に富む。〈悪人〉としての自己告白の書であるこの小説を書きながら、ジャンは「批評家たちが道徳の名のもとに有罪を宣告しなかったとしても、おまえの『悪人』は読者という、もっと大きな、もっと不確かな法廷にゆだねられるのだ」(p.313)と自分に言いきさせる。ジャ

ンは「正常と称せられる人びとの軽蔑と悪意」(pp.314-5)に敢然と立ち向かうことができない。「醜聞^{スキャンダル}へのうかがい知れない深い恐怖」(p.315)の念におそわれて、原稿を破り裂いてしまう。このようにジャンは読者の反応をおそれて『悪人』の制作をあきらめる。このかんの事情は38年のグリーンの作品執筆放棄の原因をも暗示しているのではないだろうか。グリーンもまた、同性愛者としての自己の秘密を開示するために『悪人』を作成した。しかし『ジャンの告白』は同性愛者の肉体的苦悩に言いおよんでおり、そのあらわな内容ゆえに作品の出版が到底不可能だと判断されたにちがいない。作品を公けにすること、換言すれば、告白することへのためらいが、執筆中断をひきおこした理由のひとつに、おそらくは決定的な理由になったのだと推測されるのである。

けれどもこののち、『悪人』を完成・発表しなかったことにたいする大いなる悔恨がグリーンの内心にやどることになる。1944年5月の『日記』の中で、「語らなければならなかったのに、私はだまってしまった」⁵⁰⁾とグリーンは書いている。このことばは中絶した『悪人』のことを問題にしていると思われる⁵¹⁾。46年2月には、「一度も公けにしなかったことを非常に悔やみながら『悪人』の一部分を読み返した」⁵²⁾と彼は言っている。また、「四年前から私は書きたいと思う本から逃がっている。沢山のエッセーが尻切れとんぼになってしまうことの意味を、どうして理解できないことがあるか。それは『悪人』を公表しなかったことに起因しているのだ。本を書くだけでは、作家を解放するのに十分でない。読者がその本を知る必要がある。読者がわかる必要があるのだ」⁵³⁾と述べて、作品完成・公表への並々ならぬ意欲を示している。さらに『ヴァルーナ』では、作者の代弁者とみなされる語り手ジャンヌをとおして、「最良の友にさえ打ち明ける勇気のないことがらを、無数の見知らぬ人たちに伝えたいというあの奇妙な願い」⁵⁴⁾のことが語られている。もっとも、『日記』には、「私の『悪人』がどのようなことになるか知ることが不安だ。私はそれを破棄する力がもてるかどうか自問している」⁵⁵⁾という文章もみいだせる。ここでの、『悪人』を破棄することの思いは、作品の出来ばえにたいする懸念というより、同性愛の性向にまつわる秘密が書きこまれていることに原因していると思われる。それゆえ、ここでは告白のためらいがみてとれる。しかし1938年の中絶以後、総じて秘められた真相告白の欲求が告白のためらいを制して、グリーンの内心を支配していたのだとみなせよう。55年版『悪人』の刊行に先立って発表された『モイラ』や『南部』はいずれも同性愛の状況を設定しており、告白の欲求にうながされて書かれたのだともうけとれる。見方によれば、これらの作

品は未発表の『悪人』のかわりに、もしくは、『悪人』の目的を果たすために作成されたとさえ考えられるのである。

こうしてグリーンは『モイラ』『南部』を経て、ようやく『悪人』の完成・発表にまでたどりつく。けれども1955年版からは『ジャンの告白』は削除された。作中、『告白』はポーク夫人によって隠匿され、エドウィー・ジュが読むことができなくなるのと同じように、削られることで55年版の読者もまた、それを目にすることはなかった。ではこんどは『ジャンの告白』が幻の告白になった訳を考察することにしよう。

ロベール・ド・サン・ジャンは『ジャンの告白』が削除された理由として、一人称による表現形式を挙げている。すなわち、「その直接的な語り方が、(エドウィー・ジュをとおしてドラマが描かれる)本の第一部・最終部とほとんど折り合うことができなかった」⁶⁾がゆえに削られたのだと説明している。しかし語り方の不統一は『悪人』だけにかぎらない。『ヴァルーナ』や『他者』でも一人称と三人称の両方の表現形式が採用されており、二つの人称の併用は作家グリーンの常套的な手法であると考えいえる。問題は、『告白』の挿入が内容的な混乱をきたすかどうかという点であろう。しかし『告白』が付け加わることによって作品がまとまりを欠くとは思われない。『告白』にはガストンのほかヴァスール氏やユルリックのように、第一部・第三部でも登場する人物が出てきており、ことなる視座からとらえられた人物像を提出することで、作品に奥行きと広がりを与えられている。同様の効果は、ヴァスール氏の館でのパーティーのこと(I-3)とか、ジャンが刑事に追われる一件(I-5)のような、第一部の挿話がふたたび『告白』で取りあげられていることから生じている。また、作品第一部・第三部はエドウィー・ジュの不可能な愛の物語を軸として展開しているものの、同時にジャンの〈悪人〉のドラマを内包しており、このドラマの全容は『告白』を読むことによってはじめて理解されるのだ。『悪人』は1934年刊行の『幻を追う人』と同じ構造を有している。『幻を追う人』でも、二人の主人公のうちのひとりが書いた物語である『あり得たかもしれないこと』が入れられることで、その人物の内心のドラマが解き明かされる仕組みになっている。そして『幻を追う人』の中の『あり得たかもしれないこと』と同じように、『悪人』のなかの『ジャンの告白』は、小説の中の小説として固有の小宇宙を形成しながらも、作品総体がかたち作る大宇宙を照らす光源体の役割をはたしている。したがって、『告白』は『悪人』から切り離すことはできない。逆に『告白』の削除こそ、首尾一貫性の欠如をもたらす結果となるのである。

また、ジャック・プチは「告白」削除に関連して、「悪人」と「南部」との主題の重複に注目している。たしかにこの二つの作品においては類似した状況がみられる。「南部」では、宿命的な出会いによって同性愛の情念にとりつかれるイアン・ヴィシェフスキーと、このイアンに報われぬ愛情をささげるレジーナが登場する。この二人は「悪人」におけるジャンとエドウィージェに対応する人物だと考えられる。というのも、レジーナは希望のない愛をはぐくんでいる点でエドウィージェを思い起こさせるし、イアンはジャンと同じように同性愛の苦悩の果てに命をおとすからだ。イアンは孤独の中で不毛な情熱をいだかねばならないことに絶望し、自分の愛するエリック・マックルアを故意に侮辱し、決闘に誘い出し、決闘に際しては無抵抗のまま相手の剣の一撃にたおれるのである。

「南部」では、イアン・ヴィシェフスキーのエリック・マックルアにたいする宿命的な愛が舞台の前景を占めている。第二幕第四場で、イアンは、自分を敬愛する少年ジミーに、自分の苦しい胸のうちを打ち明けている。

「——ほくは恋をしているんだ、ジミー。ほく以前のどんな人間も恋したことのないような恋を。なるほどすべての男がそんなことを言うかもしれないが、彼らのおおのの言うことは正しいのだ。ほくはもう生きていくことができない。

——もう生きていくことができない、ですって！ でもどうしてなの？

——ほくの愛する人がほくを愛することができないからだよ。

——どうしてわかるの？

——どうしてわかるかって？ 君の質問はじつに利口な質問だ。わかるからわかるのさ、ただそれだけだよ。ちらっと見るだけで、長い歳月のむなしい苦しみを予見するのにこと足りたんだ」(p.1060)。

イアンは、「ほくの愛する人がほくを愛することができない」と言うことで、相手の理解をえることなく一方的に愛しつづけなければならない同性愛者の苦悩を暗示している。しかし「どうしてわかるの？」と問うジミーに、イアンは「わかるからわかるのさ」と答えるだけで質問をはぐらかしている。イアンの告白は完全ではない。しかしこの打ち明け話に先立って、エリック・マックルアとの出会いの場面(Ⅱ-1)が置かれているので、イアンの話が同性愛の苦しみにかかわっていることが読者あるいは観客には了解されるのである。

イアンは第三幕第一場で、エリック・マックルアと対峙する。そしてエリックを決闘にかり立てるまえに、自己の愛する気持ちを伝えようとする。「エリック・マックルア、君はいまだかつて人を愛したことがないだろう。君の誇りは

一度も屈服したことがないだろう。一人の人間の魂が別の人間の魂に隷属するということがどういうことなのか、一人の人間の顔が持っている、生死を与える力がどういうものなののかも、君は、ぼくが今知っているようには知らないのだ」(p.1070)と言って、エリックに、愛することの苦しみを知らないことを非難しつつ⁵⁷⁾、イアンは愛に苦しむ内心を吐露する。それから彼はこう告げる。

「君の目を見開かせるためには一言で十分だろう。しかし言うことができないためにぼくが死にそうな思いをしているその言葉は、君には、ほかのどんな言葉よりも不可解で忌まわしいものに思えることだろう」(p.1071)。

ここではイアンのうちの、告白の衝動とためらいがかいま見られる。イアンがもんだいにしている「一言」(un mot)あるいは「その言葉」(ce mot)とは、もちろん「ぼくはあなたを愛している」(Je vous aime.)という一句である。イアンはこの文句を口にしながらしている。それを言えば告白は達成される。だがイアンはエリックの反応をおそれて言いはなつことができない。告白したいが告白することができない苦しみにイアンは責めさいなまれているのである。イアンはさらに言葉をつづける。

「君には、人間というものが愛を告白できないほどに勇気を欠くということが理解できるかい？ 自分が夢中になっている人を前にしているのに、《ぼくはあなたを愛している…》(Je vous aime...)とすることができないってことが」(p.1071)。

イアンはここでもエリックに《Je vous aime.》と明言できないことの苦澁をぶちまけている。イアンの打ち明け話をきいたエリックは、イアンが恋に苦しんでいることは認識するものの、イアンの愛の対象が自分であることを察知するまでにはいたらない。したがって、イアンは告白に失敗する。とはいえ、読者あるいは観客は、ジミーとの話と照らし合わせて、エリックを相手にしての、これら一連のせりふから、イアンがエリックを空しく愛していることを悟るのである。作者グリーンは、イアンがエリックと対峙する場面を評して、それが「偽装された告白」の場面であると解釈し、『南部』の「主題」が「イアン・ヴィシェフスキーのエリック・マックルアにたいする愛」であるとみなしている⁵⁸⁾。言いかえれば、不可能なかたちをとらざるをえない同性愛、あるいは、相手の理解の範囲を越えるがゆえに全面的な告白をなしえない同性愛者の苦悶——これが『南部』の主題だといえるのである。そしてそれはもちろん『悪人』の主題でもあるのだ。

さて、ジャック・プちは『南部』と『悪人』におけるこの主題の重複に着目し、この点に『ジャンの告白』削除の理由をもとめている。「イアンがすべて

を語ったがゆえに、彼〔ジャン〕の告白は不要になっていた⁶⁰⁾とプチは説明するのである。そして1955年版『悪人』の序文の中の、「『南部』において私は男の主人公〔イアン〕の目をとおして主題を見ようとつとめた。『悪人』においては、不可能な愛の悲劇を女性が納得しうようなかたちで理解したいと思った⁶¹⁾という文章を引用しつつ、『悪人』では、『南部』の繰り返しを避けるために、イアンに対応するジャンにかわって、レジーナに相当するエドウィー・ジュが前面に押しだされたのだと主張するのである。

しかしながら、ジャック・プチのこうした見解にはひとつの疑問がのこる。『南部』のイアンが同性愛者の苦しみを披瀝しているとしても、ほんとうにジャンの告白を不必要にするほど、「すべて」のことを語っているのか、という疑問である。『南部』のイアンの告白は同性愛の苦悩に関連するとはいえ、あくまで感情の次元にとどまっている。これにたいして、『悪人』における『ジャンの告白』は、同性愛の性向にまつわる肉欲の懊悩をももんだいにしており、イアンの告白の内容の範囲をはるかに越えている。しかもグリーンは1955年版テキストの序文の中で、長らく中断していた『悪人』を完成させた決定的な理由として、「私たちの現代世界における、肉体生活のもっとも悲劇的な局面のひとつに、真面目な読者の注意を向けること⁶²⁾」を挙げている。この意図を実現するためには、『ジャンの告白』はどうしても必要不可欠になるのではないだろうか。

とすれば、1955年版『悪人』から『ジャンの告白』が削除された原因は当然ほかのところにもとめられる。それは、38年中絶の際の事情と同じように、『告白』の赤裸々な内容と関係しているのではないだろうか。55年の時点でも『告白』を公けにすることは大いにためらわれ、はばかれたと想像されるのである。告白のためらい、読者の反応へのおそれを克服して『告白』を公表しうるためには、もっと多くの時間が必要だったということなのであろう。すでに述べたように、『悪人』の完全版は1973年に刊行された。そしてその一年後にグリーンは、同性愛者としての罪の体験をふくむ、自分じしんの肉体的懊悩を告白した自伝『青春』を発表することになる。この『青春』の公表をめぐっても、グリーンは大変逡巡したのであるが⁶³⁾、『青春』の出版を決意した時点ではじめて『ジャンの告白』の公表に踏みきることが可能になったのだと思われるのである。

『悪人』の成立・出版過程を検討してきた。この検討によって、ジャンのみならず作者グリーンにおいても告白のためらいがみとめられ、告白が長い時期

にわたって不可能なものとしてあったことがわかった。『悪人』は登場人物だけでなく作者グリーンじしんの、告白の不可能性をしるしづけているのである。

5. 結び

以上のように、グリーン作品の中の手紙をみてきた。これまでに述べてきたことを要約しておこう。総じて言えることは、グリーン作品における手紙が、書き手の内心に秘められた思いを名宛人に伝えるという本来的な機能をはたしていないという点である。たしかに『人みな夜にあつて』のフィービーの手紙のように、自分の思いを完璧に伝達しているものもみいだせる。しかしこれは例外であつて、ほとんどすべての人物たちは、内心の思いを打ち明けることにためらいの姿勢を見せている。『人みな夜にあつて』でも、アンガスはウィルレッドに全面的な愛の告白をすることを躊躇しているし、ウィルフレッドもまた、愛の手紙と「穏やかな手紙」という二通の手紙を作成することによって告白へのためらいを示している。『漂流物』のエリアーナも同様である。エリアーナがフィリップに宛てて書いた手紙は、《Je t'aime.》とされていない不完全な内容のものであるし、さらにエリアーナは手紙をマドモアゼル・ド・モロゾに託したあと、この下宿屋のおかみの手紙を破いてくれたらと願っている。この願いは手紙の内容の不完全さとともに告白のためらいをかいまみせている。『悪人』においてジャンがナポリからエドウィージェュに出した二通の手紙もまた、不十分な内容のものである。ジャンは〈悪人〉としての自己を開示し、ガストンへの愛を告白することに逡巡している。また、アドリエヌ・ムジュラおよび『モイラ』のサイモンは〈署名されない手紙〉を作成している。この手紙は告白のためらいを越えて告白の不可能性をうかがわせている。なぜなら書き手が自分の名前を言わないかぎり、たとえ思いのたけをぶちまけたとしても告白を遂行したことにはならないからだ。そして告白の不可能性を浮き彫りにするものとして、発送（投函）されない手紙があつた。『人みな夜にあつて』のウィルフレッドや『漂流物』のエリアーナやアドリエヌ・ムジュラがこれを書いているし、第三章でみたように、『モン・シネール』のエミリー、『ヴァルーナ』第二部のマルグリット、『南部』のエリックとアンジェリーナ、『モイラ』の中のモイラ、『他者』のカーリンが発送（投函）されない手紙をしたためている。『悪人』のエドウィージェュもこの手紙を作成している。ジャンも同様である。ナポリに旅立つまえに執筆された『ジャンの告白』は発送（投函）されない手紙なのだ。発送（投函）されない手紙の中には、夢みられた手

紙や想像上の発信人・受信人を設定した手紙や食べられた手紙やひき裂かれた手紙が含まれているけれども、いずれにせよこれらの手紙は作中人物たちにおける告白の不可能性を鮮明に際立たせているのである。

ところで、グリーン作品における手紙の検討から、コミュニケーションの不可能性という、作品の大きな主題が浮かびあがってくるのではないだろうか。というのも、作中人物たちが内心に秘めた思いを相手に告白し、伝えることができないという事実は、結局のところ、彼らがしかるべきコミュニケーションを達成できないことを意味するからだ。手紙の作成は、直接的にはなしえない、他者とのコミュニケーションを実現したいという欲求にもとづいている。しかし作中人物たちは手紙を発送（投函）しないことで、手紙に署名しないことで、あるいはまた、不完全な告白しかししないことで、他者とのコミュニケーションに挫折するのだ。グリーン作品の中で手紙をつうじてのコミュニケーションが成立するのは、『人みな夜にあって』にすぎない。それもフィービーだけがウィルフレッドとのコミュニケーションに成功するのだ。これ以外の作品にみいだされる手紙からは、コミュニケーションの不可能性というきびしい事実、あるいは大きな、中心的な主題が看取されるのである。

この主題は、グリーン過去の体験と結びつけて考えることができる。ヴァージニア大学留学時代における、マークと呼ばれている学友への不可能な愛の体験がそれである。自伝第三巻『遙かな土地』（1966）で回想されているように、1920年の初め、グリーンはヴァージニア大学構内でマークと突然出会い、愛の情熱にとらえられた。この出会いは<他者>の存在を啓示した。同じことであるが、この出会いによってグリーンは<他者>が存在することを知らされた。<他者>とは、孤独からの解放者となるべき存在である。けれどもこの<他者>はグリーンを孤独から救い出すどころか、逆に痛切な孤独感・断絶感をもたらした。なぜならマークへの愛は相手の理解を得がたい同性への愛であるため、グリーンはこの愛を沈黙と秘密のなかではぐくんだからである。この愛は告白されない、あるいは告白することができないものであった。グリーンは不可能な愛の苦しみに堪えかねて、フランスへの帰国を一年早めた。そして1923年7月、マークが休暇でパリにやってくる。グリーンはこの機会に、長らく胸に秘めてきた思いをマークに打ち明けようと決意する。だが友情をうしなうことをおそれて、告白を断念するのである⁶³⁾。この告白の挫折によって<他者>は決定的に「遙かなる人」になった。グリーンが『日記』の中で、「隣人、遙かなる人と呼んだほうがふさわしいこの未知なる人」⁶⁴⁾と言うとき、この挫

折の体験を踏まえているにちがいない。このようにグリーンじしんもまた、過去において、他者とのコミュニケーションの不可能性を身をもって生きたのだ。グリーン作品における中心主題はこのような体験を源泉にしていると判断されるのである。

上記のように、グリーン作品におけるコミュニケーションの不可能性という主題を、マークへの愛の挫折という彼じしんの体験と関連づけて考察した。しかしながら、グリーンの実生活上の事実をもんだいにするとなれば、この過去の体験だけに一切を還元してはならない。さらに重要なことは、グリーンが同性愛の性向のために長らく他者との断絶のなかで生きてきたという点であろう。他者が「遙かなる人」であるという苛酷な事実はマークへの愛が挫折したのちも、孤独の苦悩をひきおこすものとして、たえずグリーンを支配してきたように思われる。マークへの愛の挫折という過去の体験は、同性愛の性向を有することでのグリーの長い歳月にわたる孤独の苦しみを象徴的にあらわす出来事にすぎないのではないだろうか。つまり告白の不可能性、コミュニケーションの不可能性の中に身を置くことでの作中人物たちの苦悩は、作家グリーンが共有しうるものであるというより、そのまま作家グリーの執筆当時の、いわば<現在>の苦悩を投影しているとみなすべきなのである。

ではいったい、グリーンにとって書くこととは何なのであろうか。この点にかんして、『他者』第三部の語り手カーリンは、「どうして私はこうしたことを書くのだろう？ 書いているとき孤独感が薄らぐからだ」(p.817)と自問自答している。カーリンにとって書くこととは孤独感からの解放を目指すいとなみなのだ。このことは作家グリーンについてもいえるのではないだろうか。グリーンは『日記』の中で、「一種の均衡を保つためのただひとつの解決法は書くことだ」⁽⁶⁵⁾と述べている。ここでグリーンは創作行為が「均衡」(équilibre)をたもつための手段であると指摘している。この「均衡」は他者との隔絶の中で生きることでの肉体的苦悩とも関係するが、同時に孤独の苦悩ともかかわっている。作品とは孤独や肉体的苦悩の発現の場にほかならない。グリーンは孤独や肉欲の苦しみを作品のなかに移し入れることによって、内部の「均衡」をたもちえてきたのだ。グリーの作中人物たちは<他者>との断絶による懊悩の果てに、往々にして自殺、発狂、犯罪などといった不幸な結末をむかえる。しかし作者グリーンは苦悩を作品に書きこむことで破滅からまぬがれていると考えられるのである。この点において、書くこととはカタルシスの価値をもつといえるだろう⁽⁶⁶⁾。

しかしながら、グリーンにおける創作行為を単にカタルシスの観点からのみ理解するのは不十分であるだろう。グリーンにおいて書くこととはもっと深い意味があるのではないだろうか。このことについて、『悪人』の執筆・出版過程は示唆に富んでいる。私たちは第四章で、1936年12月の『悪人』着手から73年の完全版公表にいたるまでの過程、すなわち1938年の執筆放棄、55年の出版に際しての『ジャンの告白』の削除をもんだいにした。そして『ジャンの告白』が同性愛の苦悩を全面的に開示しているという点でグリーンじしんの告白でもあるとみなし、この執筆・出版過程をとおして、作者グリーンにおける告白のためらい、告白の不可能性をみた。だがこの過程をつうじて、同時にグリーンの告白の欲求をみてとることができるし、みてとらなければならないだろう。『悪人』の場合、書くこととはグリーンにとって、作中人物ジャンをとおして間接的にはあるけれども秘められた自己の内面的真実を提示することで、他者とのコミュニケーションを達成するところみとしてあったのではないだろうか。そして他者とのコミュニケーションの達成という目標は当然日記や自伝の目標でもあろう。そればかりか、これまでとりあげてきた他の創作作品においても、グリーンは結局同じことを目指しているのではないだろうか。もちろんここで言う他者とは、もはや特定の個人に限定されたものではなく、読者という不特定の、普遍化された存在である。他者とのへだての中で生きてきたグリーンにおいて、創作行為はこの他者への到達という一点を志向しているように考えられるのである。

とはいえ、他者とのコミュニケーションの達成といっても、それは他者とのコミュニケーションをたやすく成立させうる人間を示すことによって可能になるのではない。そうではなく、他者とのコミュニケーションの実現を切実に願いながらも、他者との隔絶の中に置かれ、呻吟する人間を描くことによってはじめてなしうるのだと思われる。なぜならグリーンもまた他者との断絶のなかで生き、苦悶してきたのだから。グリーンは『日記』の中で、「私は孤独である人のために書きたいと思う」⁶⁷⁾と言っている。つまり孤独者との連帯を希求しつつ著作活動をしたいことを表明している。また、『日記をつけること』と題された講演において、次のように述べている。

「◀私は孤独であり、孤独であることに苦しんでいる▶と書く人はこの世のすべての孤独な人びとのうちに反響をみいだします(…)。日記とは無数の見知らぬ人たちに宛てた手紙のようなものです」⁶⁸⁾。

グリーンはここで、自分の日記が孤独な人びとに宛てた手紙のようなもので

あることを語っている。同じことは小説、劇作をふくむ彼のすべての作品についてもいえよう。グリーンの想定する読者＝他者とは自分と同じように孤独な人間なのだ。それに「人間は、他の人びとから、けっして打ちたおすことができない柵によって切り離されている。これが我々一人ひとりのドラマなのだ」⁴⁰⁾とグリーンが言うように、人間が孤独存在であるという見方は彼の基本的な認識でもある。したがって、他者とのコミュニケーションの不可能性を中心主題とすることによって、読者という普遍化された他者とのコミュニケーションを打ちたてること、これがグリーン⁴¹⁾の創作行為の意味であり、これまでに検討してきた一連の手紙もまた、こういった文脈のなかでとらえなければならないのである。

註

- 40) 目次の1. 2. に該当する部分は、『ジュリアン・グリーン⁴²⁾の作品における手紙について(1)』、山口大学「文学会志」第43巻、1992、pp.133-149を、3. にあたる部分は、『ジュリアン・グリーン⁴³⁾の作品における手紙について(2)』、山口大学「独仏文学」第15号、1993、pp.147-167を参照。
- 41) 今回取りあげる *Le Malfaiteur* は、*Julien Green, Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard の t.Ⅲ に収録されている。なお『悪人』については以前論じたことがあった。『ジュリアン・グリーンにおける告白の問題(1)(2) —— 『悪人』にそくしての一考察 —— 』(山口大学「文学会志」第33巻、1982、pp.99-113; 山口大学「独仏文学」第5号、1983、pp.129-140)、および『『悪人』中の人物たち(1)(2)(3)』(同「独仏文学」第7号、1985、pp.19-42; 「文学会志」第37巻、1985、pp.33-52; 「独仏文学」第8号、pp.1-22)を参照。また、以下の文章はこれらの論考とかなりの部分で重複していることをはじめにことわっておきたい。
- 42) ユルリックはヴァスール夫妻の実の娘である。
- 43) 原文ではイタリック体で強調されている。
- 44) ポーク夫人は年に一度、春になったとき、ヴァスール氏の館の住人たちの衣服を整理する役目になっている。
- 45) *Jeunesse* は、グリーンがヴァージニア大学での留学を終えて帰仏した1922年7月から、文学活動にはいる1924年11月の頃までの時期を回想している。
- 46) 1955年版 *Le Malfaiteur* への「序文」、in *Julien Green, Œuvres complètes*, t.Ⅲ, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1973, p.1596。なお、グリーンは

- 1939年4月にカトリック教会に決定的に復帰した。
- 47) 48) Ibid., p.1596.
- 49) Ibid., p.1597.
- 50) *L'Œil de l'ouragan, Journal IV*, 27 mai 1944, IV, p.776.
- 51) プレイアード版『日記』の註釈者 Jacques Petit もこのことばをもんだいにし、「ジュリアン・グリーンはここで、未完成のままになっている『悪人』のことを疑いもなくほめかしている」と言っている（〈Notes〉 pour *L'Œil de l'ouragan*, in *Julien Green, Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t.IV, p.1660）。
- 52) *Le Revenant, Journal V*, 8 février 1946, IV, p.902.
- 53) *L'Œil de l'ouragan*, 22 septembre 1944, p.808.
- 54) *Varouna*, II, p.788.
- 55) *L'Œil de l'ouragan*, 24 janvier 1944, p.760.
- 56) Robert de Saint Jean: *Julien Green par lui-même*, Editions du Seuil, 1967, p.116.
- 57) しかし実際はエリック・マックルアは愛の苦悩を知っている。本稿第三章の(3)でも述べたように、エリック・マックルアはアンジェリーナへの愛に苦しんでいるのである。
- 58) *Le Miroir intérieur, Journal VI*, 24 février 1952, IV, p.1266.
- 59) Jacques Petit: *Julien Green, <l'homme qui venait d'ailleurs>*, Desclée de Brouwer, 1969, p.281.
- 60) 1955年版 *Le Malfaiteur* への「序文」, p.1597.
- 61) Ibid., p.1597.
- 62) この逡巡は、自伝の最初の三巻 *Partir avant le jour, Mille chemins ouverts, Terre lointaine* が1963年、64年、66年というように矢継ぎばやに刊行されたのにたいし、第四巻目の *Jeunesse* はようやく1974年に発表されたこと、つまり上梓にいたるまでにかなりの時間をついやしたことからうかがえる。また、グリーンは1972年6月、中絶した *Jeunesse* の原稿を読み返しながらか、「この話を書きつづけ、公けにすることを私は時折考えるが、なかなか決断がつかない」と言っている（*La Bouteille à la mer, Journal X*, 17 juin 1972, VI, p.40）。
- 63) この場面は、1950年10月の『日記』の中では、次のように回想されている：「私たちは1923年の或る朝、セーヌ河に沿って散歩していた。私は、「ポン・ロワイアルの橋を渡るまでに心に思っていることを伝えよう」と自分に言い聞かせていた。不意には

げしく興奮して私は彼の腕をつかむ。「君に言いたいことがある。とても重要なことなんだ」と私は彼に言う。彼はしばしば私の真剣な態度をからかったものである。「わかった、話せよ。聞いてやるから」。私たちは橋のところに着く。今にもころんできりそうなのがする。私ははっきりと理解する、もし自分が話せばマークの友情をすぐさま失う、それも永遠に失うってことを。「よく考えたが、話すべきことじゃないよ」と私は彼に言う。この瞬間は、私の青春時代の中でもっとも苦しい瞬間のひとつだった」(*Le Miroir intérieur*, 4 octobre 1950, p.1181)。

64) *Vers l'invisible*, Journal VIII, 9 juin 1959, V, p.190. またグリーンは次のようにも言っている:「私は、自分自身から出て隣人のところまで行くのに二十年かかったように思う。それも苦悩の道をとおってだ。隣人はわれわれからあまりにも遠くにいるように見えるので、隣人のところにまで達するには時として全生涯かかることもある。自己から出て、毎日みかける隣人のところまで行くこと、それは途方もない大旅行だ」(*Vers l'invisible*, Pâques 1963, p.327)。

65) *Le Miroir intérieur*, 3 juin 1951, p.1221.

66) Pierre Brodin はグリーンにおける創作行為にふれて、「芸術とはカタルシスである」と述べている (*Julien Green*, Editions Universitaires, 1957, p.79)。

67) *Derniers beaux jours*, Journal II, sans date 1939, IV, p.516.

68) *Tenir un journal*, III, p.1404. なおこの講演は、グリーンが第二次世界大戦のためにアメリカに滞在していた1941年の終わりにプリンストン大学でおこなったものである。

69) *Le Miroir intérieur*, 25 juin 1941, p.589.